

第9章 結びと今後の課題

9.1 本研究のまとめ

本研究は、日本語と中国語の対照研究の立場から、因果関係を表す複文について、構文的、意味論的に幅広く考察を行った。結果的には、因果関係を表す複文の枠組みの相違、構文的な類似点および相違点、接続表現の機能の異同、接続表現の表現類型の相違、使用上における制約の相違などを明らかにした。また、両言語の因果関係に関する認識上の違い、接続表現をはじめ、因果関係を表す複文における様々な表現マーカ―の使用上の違いも究明した。

本研究は序章から9章までの全10章から構成されており、各章の内容は以下の通りである。

序章では、因果関係を表す複文における本研究の動機、目的、対照の意義、日本語教育における対照の意義、課題設定および研究対象、研究内容、研究方法などについて述べた。

第1章では、まず日本語の「条件文」と中国語の「主従複文」の分類、枠組みおよび両言語における因果関係を表す複文の位置づけについて見てきた。そして、日本語の因果関係を表す複文において、最も多用されている「から・ので」の意味機能の違いに関するとりえ方を取り上げた上、「から・ので・ため(に)・て」の機能的な違いに関する論述も取り上げた。さらに、中国語の因果関係を表す複文に関する先行研究を概観し、“关联词语”の範囲、複文の「標識分類」および「意合複文」に関しても述べた。最後に本研究の位置づけを提示した。

第2章では、両言語の因果関係における接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性について、接続表現の機能、原因・理由を強調する要素の有無、構文順序（倒置文）といった点を視野に入れ、考察を行った。結果的には、次のようなことを明らかにした。

日本語は前後節の因果関係の度合いが強いか否かを判断する場合、接続表現が因果関係を明示する機能を持つか否か、または原因節を強調する成分が使用されているか否か、構文順序がどうなっているかによって判断を下す。一方、中国語は接続表現が因果関係を表す機能を持つものであるか否か、接続表現の数、強調成分の有無と多さ、構文順序によって判断する。

第3章では、接続表現の機能および使用範囲の異同について比較対照を行った。日本語の因果関係を表す複文の枠組みに従い、モダリティ形式との関連性を考慮した上で、因果関係を表す複文を「単なる原因・理由を表す文」「推量・判断の根拠を表す文」「発言・態度の根拠を表す文」に類別し、各原因・理由文における両言語の接続表現の使用について比較対照を行った。

その結果、日本語の接続表現の「から・ので・ため(に)・て」は文の性質によってそれぞれ制約を受ける場合もあるが、接続表現の機能は中国語の接続表現より広いということも明らかになった。また、日本語の接続表現の使用範囲は中国語より広いということも明らかになった。日本語の接続表現の使用は、文の性質の制約を受けず、事態変化、行為の実施もさることながら、感情の表明、人またはものに対する感情的な評価、自然現象の形成または変化について述べる際にも、それらが生じた原因・理由が明示される。それに対して、中国語の場合は話者自体の感情の表明、対象(人かもの)に関する話者の感情評価、または自然現象の形成と変化について述べる場合、それらが生じた理由を明示できない。つまり、接続表現の使用が許容されていないのである。

第4章では、因果関係を表す複文における両言語の原因節の焦点化の特徴について、原因節の焦点化の表現形式と焦点のマーカーの位置に注目し、対照分析を行った。結果としては、日本語には2種類の焦点の表現形式が見られた。そして焦点マーカーの位置は固定されており、構文形式により焦点を表しているのが特徴だということがわかった。これに対し中国語表現では、焦点の表現形式は語彙によるものが多く、焦点マーカーは原因節に置かれるものと結果節に置かれるもののいずれもあることがわかった。そして焦点マーカー数はひとつに限定されず、焦点の表現形式は日本語よりバラエティに富んでおり、焦点マーカーの使用が日本語より自由であることもわかった。

第5章では、日中両言語の因果関係を表す複文における接続表現の使用と主語、述語動詞との関わりについて述べた。前後節は主語が同一のものであるかどうか、述語動詞が意志性をもつものであるかどうか注目し、8つのパターンに分け、各パターンにおける接続表現の使用の特徴について比較対照を行った。

結果としては、前後節が同主語または異主語のいずれの場合でも、両言語とも因果関係を明示的に述べる接続表現の使用は制約を受けにくい、因果関係を明示的に示す機能を持たない接続表現の使用は制約を受けやすいということがわかった。また、因果関係を明示する機能を持たない接続表現の使用に関しては、前後節が同主語の場合は、日本語の方

が中国語より制約を受けにくく、前後節が異主語の場合は、中国語の方が日本語より制約を受けにくいということも明らかになった。さらに、中国語の接続表現の位置は主語と関係していることも判明した。原因節に接続表現が使用される場合は、主語の前と後ろの何れに置くことも可能であるが、主節に接続表現が使用される場合、主語の前に置かなければならないものと、主語の前と後ろのいずれにも置けるものの2種類があった。前後節が異主語の場合、主節の接続表現の使用位置が限定されるだけでなく、従属節に置かれる場合も主語の前でなければならない。

第6章では、日本語と中国語の時間表現と接続表現の使用との関わりについて考察した。結果的には、両言語は時間表現との関わり方が違っており、日本語の接続表現の使用は、テンスと関わっているのに対して、語形変化を持たず、テンスの体系はまだ確認されていない中国語はアスペクトと関わりがあることが判明した。

第7章では、因果関係を表す複文における日中両言語の構文モデルについて、構造上の特徴だけではなく、文を構成していく接続表現の機能との関連性も視野に入れて検討を行った。

結果としては、「順行型」の場合、日本語にある構文モデルは、中国語にもそれと対応できる構文モデルが見られるが、文を構成していく際、異なる制約を受けることがわかった。日本語は複数の節を羅列して原因節を構成する場合、原因を表す接続表現の機能を考慮し、原因を明示的に示す機能を持たないものから明示的に示す機能を持つものへと構成していくのが特徴的である。これに対して中国語は、同じ条件で構成し、原因を表す接続表現が使用される場合、接続表現の位置や統一性を考慮しながら原因節を構成していく特徴がある。「逆行型」については、「順行型」と同様に相違点および類似点も見られるが、構文順序を変えることによって、原因節を焦点化させる機能をもつ接続表現の働きに関して、両言語に共通点があることが判明した。「変形型」については、中国語は複文として成立するが、日本語は複文レベルの構文としては成立できず、中国語の「変形型」構文モデルを日本語で表現しようとする、複文のフレームを越え、文の接続関係として表現するしかないといった両者の相違点も明確にした。

第8章では、第2章から第7章までの研究結果に基づき、中国語母語話者の日本語学習者にとっての因果関係を表す複文における習得上の問題点を指摘した上で、そういった難点が何に起因しているかについて分析を行った。また、日本語因果関係を表す接続表現の扱われ方の現状を知るために、日本と中国で出版された教科書や日本で出版された中国語

母語話者の日本語学習者向けの解説書、教師用マニュアルなどを調査し、それらに潜む問題点を見出した上で、日本語教育への改善案の提示を試みた。

第9章では、本研究の各章の研究内容と得られた結果の要点をまとめた上、本研究の結論を記述する。最後に因果関係を表す接続表現に関する研究において残されている課題について述べる。

以上、本論文の各章の研究内容および結果について概観した。これまでの様々な視点から行った両言語の因果関係を表す接続表現に関する比較対照分析を通して、以下のように結論付けられる。

9.2 結論

本研究の結論に関しては、次の4つの側面から概括して記述する。

- ① 因果関係を表す複文に関する認識の違い
- ② 接続表現の使用上の制約
- ③ 接続表現の機能的な異同
- ④ 因果関係を表す複文におけるマーカ―の多様化、自由化の相違

9.2.1 因果関係を表す複文に関する認識の違い

両言語においては、因果関係を表す複文に関して認識の違いがある。こうした認識の違いは両言語の接続表現の使用範囲と、因果関係を表す複文の枠組みの異同を反映している。日本語は、物事の発生・変化または行為、感情的な評価、感情の表明について述べる際は、如何なる場合でも、発生・変化の原因、行為が行われる理由、そう評価する理由を認識し、接続表現を用いて示す。したがって、日本語の因果関係を表す複文のフレームワークは非常に広い。しかしながら、日本語と同様なフレームワークで、中国語の因果関係を表す複文について検討してみると、日本語では因果関係を表す複文として扱われているものであっても、中国語では因果関係を表す複文として扱いにくいケースと、認識されにくいケースが存在する。このような特徴は、自然現象描写文や話し手自身の感情表明の原因・理由文、話し手の他人への感情的な評価・理由文、話し手の発言・態度の根拠文のいずれにも

見られる。両言語の因果関係を表す複文に関する認識の相違を図示すると、以下の通りである。

【図21】 日中の因果関係を表す複文に関する認識の違い

	因果関係文	並列文	感嘆文	その他
①事態原因を表す文	黄色			
②ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文	黄色			
③継起関係を伴う行為の理由文	黄色			
④自然現象変化と状態変化の原因・理由文	青色	灰色		
⑤感情表明の原因・理由文	桃色			
⑥感情評価の原因・理由文	青色		灰色	
⑦心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	黄色			
⑧説明的な原因・理由文	黄色			
⑨原因を根拠に結果を推量判断する文	黄色			
⑩結果を根拠に原因を推量判断する文	黄色			
⑪発言・態度の根拠を表す文	桃色			

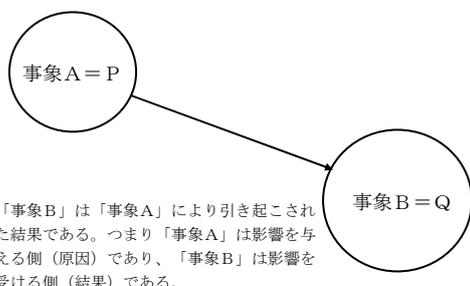
日本語では因果関係を表す複文として扱われる範囲が広い。(青色部分)

中国語では因果関係を表す複文として扱われる範囲が狭い。(黄色部分)
並列文や感嘆文などとして表現されるものがある。(灰色部分)
因果関係複文として認識されにくいものもある。(桃色部分)

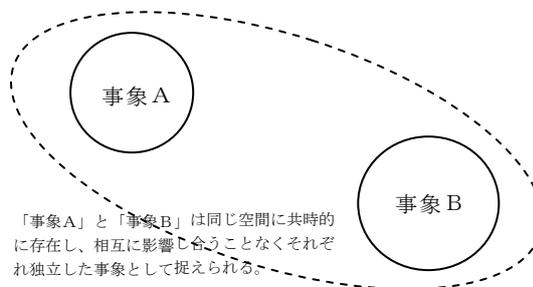
【図 21】において、日本語は 11 種類の文をすべて因果関係を表す複文だと認めているのに対して、中国語では「感情表明の原因・理由文」と「発言・態度の根拠を表す文」が因果関係を表す複文として認識されにくいものになっており、「自然現象変化と状態変化の原因・理由文」と「感情評価の原因・理由文」はそれぞれ「並列文」と「感嘆文」として扱われている。よって、両言語において因果関係を表す複文に対する認識の違いがあると言える。

それらの認識の違いが生じるのは以下のようなことに起因していると考えられる。「自然現象変化と状態変化の原因・理由文」については、日本語の場合、複数の事象によって構成された場面について描写する際、同じ空間に共時的に存在する事象に関しては、事象と事象は関係し合うものだと捉え、相互の関係は影響を与えつつあり、影響を受けつつあるといった同時に変化していく関係だと認識されている。一方、中国語は、同じ空間にある事象

を全体的に捉える特徴がある。事象と事象は相互影響し合うのではなく、同じ場面にあるそれぞれ独立した事象として捉える。両者の認識上の特徴を図示すると、以下のようなになる。

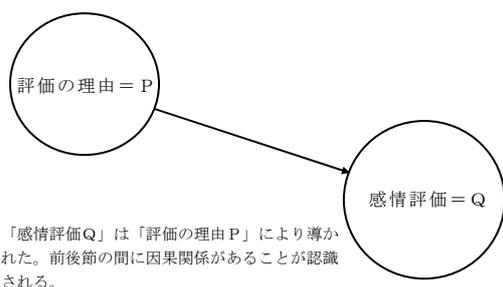


【図22】日本語における自然現象の描写文への認識

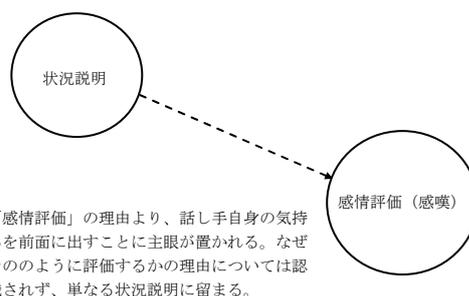


【図23】中国語における自然現象の描写文への認識

「感情評価の原因・理由文」に関しては、日本語は、話者が他人またはものについて評価したりする場合、評価対象の行為や性質などが評価の理由だと認識し、そう評価する理由を明示させ、自分の心からの所感を述べる。つまり、前者の評価対象の行為や特徴などが、後者の話者の所感と関係しており、後者のそういった所感が、前者によって導かれたものだと捉えられる。それに対して中国語は、後者のそういった所感を述べる場合、前者をそのような気持ちまたは感想が生じた理由だとして認識せず、状況説明だとしか捉えていない。この場合、話者の主観的な気持ちと強い感情が前面に出されており、「感情の評価の原因・理由文」とは言い難く、“感叹句（感嘆句）”の一種だと捉える。



【図24】日本語における感情評価の理由文への認識



【図25】中国語における感情評価の理由文への認識

「感情表明の原因・理由文」と「発言・態度の根拠を表す文」に関しては、日本語では、話し手は表明された感情が生じた理由、ある発言をした理由または態度をとった理由を認識しながら、感情を表明したり、発言したりするため、因果関係を表す複文として扱われ

ている。一方、中国語は、この2種類の文に対して、前者が後者の感情表明の理由、または発言した根拠だと認識されにくく、「感情評価の原因・理由文」と同様に、そういった理由を単なる状況説明として捉えている。なお、この2種類の文は「感情評価の原因・理由文」とは異なり、前者と後者は関係し合うものだと捉えることもできる。そういった捉え方の実現した形は、話し手の一方的な話の中ではなく、聞き手からの問いかけを受けて応える場合に、前者と後者が関係し合うものだと認識できる。

このように、因果関係を表す複文に対する両言語の捉え方や認識上の違いが存在することが明らかになった。

9.2.2 接続表現の使用上の制約

日本語の接続表現は機能によって、2種類に大別できる。それは因果関係を明示するものと、明示しないものである。中国語の接続表現も同様に分類できるが、「静的因果関係」を表すものと、「動的因果関係」を表すものの2種類に分類できる。使用上の制約に関しては、日本語は形態を重視し、接続表現は従属節に後接しなければならないため、従属節の構文要素への配慮が必要となる場合が多い。そして接続表現を用いる際、従属節のテンス形式がル形かタ形か、従属節の述語の性質が状態性述語か動作性述語か、従属節の主語が非情物か有情物かといった従属節の構文要素を考慮しなくてはならないケースがある。主節の構文要素への配慮も必要となる場合もあるが、主に文末のモダリティ形式との関わりといった点に反映される。

一方中国語は、形態の拘束を受けず、多種多様な表現形式があり、一文に多数の接続表現を用いることができるが、接続表現の位置への配慮が必要である。従属節で用いられる接続表現は、主節と同主語の場合、主語の前か後ろかといった位置的な制約を受けにくいですが、主節と異なる主語の場合、接続表現の位置が主語の前でなければならない。

- | | | | |
|-----|--------|---|---|
| (1) | 同主語の場合 | { | 我因为生病了，所以没去上课。 (成立する)
因为我生病了，所以没去上课。 (成立する) |
| (2) | 異主語の場合 | { | 因为我没去，所以他也就没去 (成立する)
* 我因为没去，所以他也就没去 (成立しない) |

中国語は、主節で用いる接続表現の種類が多く、位置的には主語の後ろか前かに制限さ

れているものと、主語の制約を受けないものの2種類に分かれる。また、主節のアスペクトが已然か未然か、表現内容が意志的な行為であるかどうかといった制約を受けるケースもある。動的原因関係を表すものが使用される場合は、主節が已然のアスペクトであると同時に、動的表現でなければならない。主節が行為である場合、主節に接続表現の使用が必須となる。

このように、両言語においては、接続表現の使用はいずれも従属節と主節への配慮が必要とされる場合がある。しかし、日本語の複文における接続表現の使用法、相互の使い分けに関しては、主節に主眼を置くことが重視されているが、多くの場合、従属節と関わっており、従属節による制約を受けやすい。一方、中国語は従属節に接続表現が置かれる場合、その位置への配慮が必要である以外、他の面においては制約を受けにくい。中国語では、主節に置く接続表現の種類が多く、主節による制約を受ける傾向が強い。

9.2.3 接続表現の機能的な異同

因果関係を明示的に示すものとしては、ニュアンス的な違いを抜きにすると、日本語では「から・ので」の使用範囲が広いのに対して、中国語は“因为”“所以”の使用範囲が最も広い。日本語の「から・ので」には原因・理由を表す以外の機能もあるが、前後節の意味関係を表す上で、専ら因果関係を表すものである。一方、「ため(に)」「て」は、因果関係を表す複文に使用されるだけでなく、それぞれ他の意味関係を表す機能も有している。複数の意味関係を表す機能を持つものを用いて、因果関係を表す場合、ニュアンス的には、専ら因果関係を表す「から・ので」との違いがあり、因果関係を表す複文における使用条件は「から・ので」より厳しい。

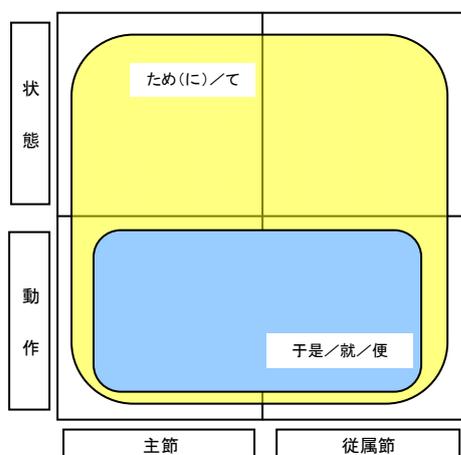
中国語においても、同様な傾向がある。中国語では、“因为”“所以”などが因果関係を表す機能のみを持ち、因果関係を表すものとして曖昧なところがないため、使用条件がゆるく、ニュアンス的な効果を求めなければ、使用範囲もかなり広い。一方、“于是”“就”“便”の場合、“于是”は因果関係を表す機能を持ちながら、継起関係を表す機能も持っている。“就/便”は因果関係を表す複文だけではなく、条件複文にも用いられる。こういった多種の複文の中で用いられるものは、因果関係を表す場合、機能は因果関係のみを表す“因为”“所以”などより狭くなってしまい、使用条件が厳しい。

両言語において、使用条件が厳しいもの同士の間にはひとつの共通点がある。日本語の「た

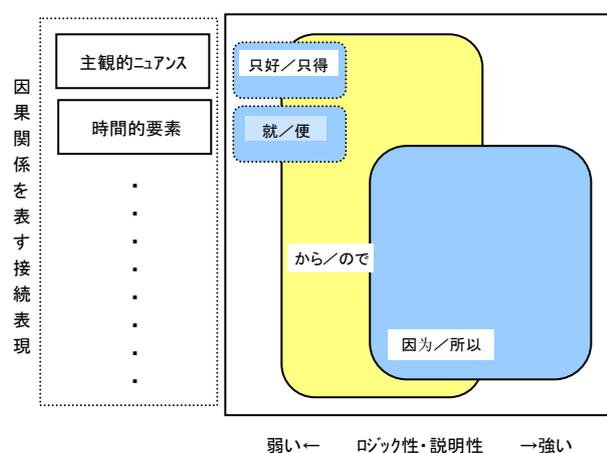
め(に)」「て」は継起性に従う表現であり、中国語の“于是”“就”“便”も継起性に従うものである。しかしながら、同じ継起性をもつものとは言え、「ため(に)」「て」は主節が状態か動作かのいずれも使用できるが、中国語は動作でなければ使用できない。この点からも、日本語の接続表現の機能は中国語より広いということが分かる。

因果関係のみを表す日本語の「から・ので」と中国語の“因为”“所以”などはそれぞれ広い範囲で使用することができるが、“因为”“所以”はニュアンス的にロジック性、説明性が強いため、「から・ので」のように、様々の言語環境の中で用いられ、多種のニュアンスを表せる機能を有していない。そのため、前後節にある主観的なニュアンスや時間的な要素を表そうとする場合、“关联副詞”と合わせて使用するか、“关联副詞”のみを用いて表現するかといった手段が求められる。

このように、因果関係のみを表すものと、因果関係を表すだけでなく、他の意味関係を表す機能も有するものに関しては、いずれも、日本語の接続表現のほうが中国語より扱える範囲が広いと結論づけることができる。



【図26】日中の継起性に従う接続表現の機能的な相違



【図27】日中の因果関係のみ表す接続表現の機能的な相違

9.2.4 因果関係を表す複文におけるマーカーの多様化、自由化の相違

日本語は形態を重視しているため、接続表現をはじめ、焦点マーカー、時間表現がすべて定形化されている。一方、中国語は形態を重視しないため、接続表現をはじめ、焦点マーカー、アスペクトマーカー、推量マーカーのいずれも単数で使用や複数で使用する場合がある。従属節のみに使用するもの、前後節同時に使用するものなど、多種多様であり、

組み合わせがバラエティに富んでいる。要するに、日本語の各種のマーカ―の形式は単一であり、決まった型にはめ込むようであるが、中国語の各種のマーカ―の表現形式は融通がきき、形が決まっておらず、自由に組み合わせられるということである。

(3) 也许是由于往昔的日子这里多荒凉多风沙，因此这里的市民，不管大人小孩，都特别爱惜花草树木。 《当代》

(4) 大概是因为他没有经验，所以才做得这样差的吧。 (自作)

(3)では推量マーカ―の“也许”、焦点マーカ―の“是”、原因理由を表す接続表現の“由于”“因此”が使用されている。(4)では、推量マーカ―の“大概”“吧”、焦点マーカ―の“是……的”、“才”、因果関係を表す接続表現の“因为”“所以”が使用され、各種のマーカ―が複数になっている。

このように、日本語では形態化を重視し、構文上は各種のマーカ―が定型化された印として用いられるのに対して、中国語は、語彙による表現形式が多く、各種のマーカ―の使用は、形式に拘泥せず、単数でも、複数でも特に限定されておらず、分散的に従属節と主節に蒔かれ、それぞれの機能を果している。

9.3 今後の課題

本研究は因果関係を表す接続表現を対象として、日中対照の立場から記述的な研究を行った。因果関係を表す接続表現におけるいくつかの研究課題を設定し、両言語のそれぞれの特徴について検証した。

結論としては、両言語において、因果関係を表す複文に関する認識に違いがあり、因果関係を表す複文の枠組みが異なっていることを明らかにした。また、接続表現の使用上の制約、機能、自由性、多様性に関して、両言語における相違点と類似点も判明した。

本研究を通して、因果関係を表す接続表現における両言語の特徴や様々な類似点と相違点を究明したものの、残されている課題はまだ多くある。本研究では、方法論として、文学作品における地の文を中心に検討し論証したため、両言語の因果関係を表す接続表現に潜む特徴を見出せない部分が存在していることが否めない。また、因果関係は単なる節と節のレベルの因果関係だけではなく、文と文との因果関係にもある。したがって、今後調

査資料の範囲をさらに広げ、文章・談話レベルにおける両言語の因果関係を表す接続表現に関する対照研究を行うことも求められる。そして、文章・談話レベルにおける日中両言語の因果関係を表す接続表現の対照研究を通して、日中両言語の広範な因果関係の特徴、体系を明らかにすると同時に、両言語の因果関係を表す接続表現の意味機能などについても究明する。また、因果関係を表す接続表現は他の意味関係を表すものとの関わり方、多重複文における相互の包含関係などについても考察する必要がある。

今回の研究結果を入り口として、今後、因果関係に関する研究の枠組みを更に拡大し、両言語の因果関係の諸相、因果関係に関する捉え方、構造上の相違、構文諸要素との関連性等を究明していくことによって、最終的に両言語の因果関係の全体像を浮き彫りにすることを目指したい。